

2023. 3. 5 (日) 使徒7:30~35

7:30 四十年たったとき、シナイ山の荒野において、柴の茂みの燃える炎の中で、御使いがモーセに現れました。

7:31 その光景を見たモーセは驚き、それをよく見ようとして近寄ったところ、主の御声が聞こえました。

7:32 『わたしは、あなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』モーセは震え上がり、あえて見ようとはしませんでした。

7:33 すると、主は彼にこう言われました。『あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。』

7:34 わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見た。また彼らのうめきを聞いた。だから、彼らを救い出すために下って来たのだ。今、行け。わたしは、あなたをエジプトに遣わす。』

7:35 『だれがおまえを、指導者やさばき人として任命したのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は、柴の茂みの中で彼に現れた御使いの手によって、指導者また解放者として遣わされたのです。

<説教>

初代教会の奉仕者ステパノの最高法院での裁判における証言、説教の中から、今日もモーセについて語ったことを聞きます。ステパノはモーセについて続けて語り、そのモーセに御声をおかけになってモーセを召し、エジプトにお遣わしになった主なる神のことを語るのです。出エジプト記では3章1節から10節に記されているところです。

〈四十年たったとき、シナイ山の荒野において、柴の茂みの燃える炎の中で、御使いがモーセに現れました。〉(7:30) 前回聞いたように、モーセはエジプトの王ファラオの娘の子として育てられ、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がある人となりました。そのモーセが四十歳になったとき、エジプトの奴隷として非常に苦しめられていた同胞イスラエルの民を顧みる思いが心に起こりました。モーセはそれを「自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられるのだ」と理解しました。そしてそのことを同胞たちも皆が理解してくれるものと思っておりましたが、彼らは理解しませんでした。それどころか、「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。」と言ってモーセを押しつけ、受け入れませんでした。モーセはミディアンの地に逃げて寄留者となったのでした。それから〈四十年たった〉ので、モーセは80歳になっていました。ミディアンの地で羊飼いをしていたモーセは群れを導いて〈シナイ山〉にやって来ました(cf.出エジプト3:1 そこでは「ホレブ」と言われている)。おそらくこの羊飼いとして働いた40年の間に神はモーセを色々と訓練なさったことでしょう(羊飼いとして羊の群れを導くというのも何やら暗示的のように思われます)。ミディアンの地での40年に渡る神の訓練が終わり、神はいよいよモーセをはっきりとご自分の御用にお召しになりました。〈柴の茂みの燃える炎の中で、御使いがモーセに現れ〉、〈御声〉(31)を聞かせなされたのです。

〈その光景を見たモーセは驚き、それをよく見ようとして近寄ったところ、主の御声が

聞こえました。〉(31) その光景は、エジプトのあらゆる学問を教え込まれていたモーセでもわからない驚くべきこと、神の御使いの現れでした。その御使いが語った〈主の御声〉はこうでした。〈『わたしは、あなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』〉(32a) 〈主の御声〉を聞いて〈モーセは震え上がり、あえて見ようとはしませんでした。〉私たちは神のみことばを聞くとき、つまり聖書を読み、またみことばの説教を聞くとき、「震え上がる」ほどの慎みと恐れをもって神の御前に立ち、聞いているだろうかと深く反省させられます。〈わたしは、あなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である〉とは、「わたしは、あなたの父祖たちアブラハム、イサク、ヤコブを召し出し、導き、彼らに与えた約束を決して忘れず、必ず成就する真実な神である」、また、「わたしは、あなたがまだこの地上に生まれていないときから既にあなたを知っている、あなたの神である」、更には「わたしは、あなたと同じくアブラハム、ヤコブ、イサクの子孫であるイスラエルの民に対してあなたが果たすべき使命、責任を与える神である」ということまでも示している、実に重い、厳かなる宣告であり、自己証言でした。

そういう主なる神、聖なるお方がモーセに現れた地だったので、そのときモーセが〈立っている場所は聖なる地〉(33)だったのです。考えてみれば、もともと「自然に」聖なる地などはないと言っていいと思います。もちろん、神は霊ですから人間の目には見えず天地どこにでも遍在しておられるのは間違いありません。それでもしかし、やはり神が「特別に」居られる「聖なる」場所は昔も今もあると言うべきでしょう。それは、神がご自分の民とともにおられる場所、神がご自分の民にお語りになり〈御声〉を聞かせてくださる場所です。それは即ち、今は私たちがいる場所です。それは今は確かにこの教会であり、そしてこの後、私たちが神によって遣わされて行く、それぞれの所なのです。イエス・キリストがみことばと聖霊によって私たちとともにおられるなら、そういう私たちが立っている場所は、神が臨在なさる聖なる地だと言えると思います。私たちはその場所で、神によってその場に遣わされ、置かれている（配置されている）という信仰をもって、震え上がるほど厳粛に神を恐れて、神の御声に聞き従って、神のしもべ、かしらキリストのからだ、手足として考え、語り、行動するのです。

主なる神はモーセをそういう者として、ミディアンの地からエジプトにお遣わしになりました。〈わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見た。また彼らのうめきを聞いた。だから、彼らを救い出すために下って来たのだ。今、行け。わたしは、あなたをエジプトに遣わす。』〉(34)と。そしてステパノはこの神によるモーセの派遣についてまとめて言いました。〈『だれがおまえを、指導者やさばき人として任命したのか』〉と言って人々が拒んだこのモーセを、神は、柴の茂みの中で彼に現れた御使いの手によって、指導者また解放者として遣わされたのです。〉(35)と。

前回の箇所学びの終わりのところで、40歳のときのモーセが人々から拒まれたのは、彼の未熟さの故という面もあっただろうと考えました。つまり〈自分の手によって〉(25)何とかしてやろうという面が強すぎたのではないかと。そしてそのわりには、「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。」と反論されると一転ミディアンの地に逃げてしまうような臆病な面も一方にあったのがモーセでした。そういうモーセを神がいわば「再教育」するためのこの40年間だったように思われます。神はじっくりと40年をかけて、モーセに自分の学問とか力あることばとか行いとかに頼ることを

やめさせ、今度は思い違いや聞き間違いのないようにはっきりと〈御声〉をお聞かせになって、モーセを「再献身」にお召しになったのです。神がモーセの手によってイスラエルの民に救いを与えようとしておられることは間違いありませんでした。ただ、40歳のときは、まだ神のときではありませんでした。あのときモーセが失敗し、挫折したのは彼が未熟だったからというより、本質的には、彼が行動を起こすには神のみこころのときではなかったからでした。ステパノは触れていませんが、出エジプト記の方には、この神の召しの御声を聞いた後、モーセが自分の口下手を理由に相当神に抵抗したことが記されています。モーセはなお（色々な面で）未熟でした。しかし、神のときである以上、神はモーセをみことばとするしによって励まし、戒め、彼を80歳にしてイスラエルの民の〈指導者また解放者〉として〈任命〉し〈遣わされた〉のです。「だれがおまえを、指導者やさばき人として任命したのか」と言われたら今度は堂々と、はっきりと「私の主なる神、アブラハム、イサク、ヤコブの神だ」と答えることができるように神がしてくださいました。それ故、もう人々に拒まれても人々を恐れたり逃げたりする必要はなくなりました。恐れるべきは常に〈御声〉を聞かせ、私たちが遣わされ〈立っている場所〉どこにでもともにおられる主なる神だけです。神はそのような者として私たちをも一人ひとりを育て、主イエス・キリストの手によって導き、遣わし、今の場所に配置してくださっているのです。